

〔論文〕

正倉院と夜光貝

——南島螺殻交易開始試論——

木下 尚子

A Study on the Beginning of Great Turban Shell Trade between Ryukyu and the Japan Mainland in the 8th Century Based on the Treasures of Shosoin Repository

Naoko KINOSHITA

要旨

14世紀以前の南島（琉球列島）と大和（本土地域）の交易は、7世紀以前の先史時代貝交易と、9世紀以後の古代・中世貝交易に大きくわかれる。後者の交易は、南島のヤコウガイを大和に届けて日本の螺鈿生産を支え、日本・中国・朝鮮間の貿易に大きな意味をもった。本稿は後者の交易がどのように始まったかを、とくに8世紀に焦点を当てて考察するものである。具体的には正倉院に伝存する国産あるいはその可能性のあるヤコウガイ製品（「斑貝鞆御帶残欠」、「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」と「檜和琴」）を検討し、螺鈿国産化の過程を整理して、南島のヤコウガイが大和において文化的意味を形成してゆく状況を段階的に論じた。さらに、南島のヤコウガイが螺鈿素材として認識される契機が、素材不足による大和側の強烈的な需要にあったことを指摘して、9世紀の交易開始に至る歴史的状況を明らかにした。

キーワード 正倉院、ヤコウガイ、8世紀、貝交易、南島、琉球列島、大和、東大寺献物帳、螺鈿、国産化

1 問題の所在と目的

弥生時代から古墳時代に至る約800年余、大和⁽¹⁾と南島⁽²⁾の間には、熱帯産貝殻を介した需給関係があった（木下1996a）。大和の人々が腕輪や馬具の装飾として、琉球列島産大型巻貝（ゴホウラ⁽³⁾、イモガイ⁽⁴⁾）を恒常的に求めたからである。ところが7世紀半ば、大和に古代国家が成立すると社会や文

化は大きく変わり、人々の興味は熱帯産貝殻からにわかに遠のいてしまう。

8世紀、両地域間に新たな経済関係は生まれず、薩摩半島に至るサンゴ礁島嶼の連なりも、稀に漂着する遣唐使の船送還路以上の意味をもたなくなってしまう。

9世紀後半になると、熱帯産大型巻貝であるヤコウガイ⁽⁵⁾（図1①②）が大和に登場し、10世紀にかけて螺鈿工芸品⁽⁶⁾の素材や祭礼の容器として普及してゆくことを、複数の文献が記録している（荒川1985、小島1990、山里1999）（写真1）。同時期の琉球列島（南島）にのこる大和の役人の足跡や大宰府の木簡記録からみて、これらヤコウガイが琉球列島産であることはほぼ確実である（木下2002）。さらにこの時期、密教寺院でホラガイ⁽⁷⁾の需要が高まり、琉球列島は同時にホラガイの供給地としての意味ももち始める（木下1996b、1996c）。こうして大和と南島は、貝殻の需給関係を再び築くことになる。この貝交易は11世紀以降の国産螺鈿の隆盛に対応し、大和の中世的流通（広域流通）にそのまま連結して、大量のヤコウガイを大和に運んだのである（木下2002）。

以上から、弥生時代から中世に至る間の大和と南島の交易を、

- ① 弥生時代から古墳時代の先史時代貝交易（紀元前3世紀～7世紀前半）、
 - ② 8世紀前後の空白（7世紀後半から9世紀前半）、
 - ③ 平安時代以降の古代・中世貝交易（9世紀後半～14世紀前半）、
- の三段階に分けて捉えることが可能である。

ところで同じ熱帯産貝殻を対象にしながらも、二つの貝交易（上記①と③）の内容は明確に異なっていた。前者の交易はゴホウラ・イモガイを主体としてヤコウガイ、ホラガイを含まず、逆に後者においてゴホウラ、イモガイは登場しない⁽⁸⁾。前者の交易では貝殻の形状が重視されたが、後者では貝殻の質が評価された。貝殻を加工して得られたのは、前者では独創的装身具であるのに対し、後者では舶来技術による模倣品であった。二つの貝交易は、それぞれの時期の独立した消費を満たすべく実現したものであり、両者間に歴史的関連は認められない。

ここで問題にしたいのは、二番目の交易（上記③）が2世紀近く空白の後どのように成立したのかという点である。交易が開始されると、ヤコウガ



①② ヤコウガイの表裏

③ ヤコウガイ貝殻破片

左：表面の不透明層（稜柱層）を研磨して一部に下の真珠層を出したところ。

右：貝殻の内面。この真珠層が螺鈿素材になる。貝殻断面に、真珠層と稜柱層が2層にみえる。

④ 奄美大島北端、見崎遺跡のヤコウガイ出土状況（7世紀）
（笠利町歴史民族史料館中山清美氏提供）

図1. ヤコウガイと奄美大島における出土状況

イの潤沢な供給によって大和の螺鈿技術は発展し、職人たちは中国を凌ぐレベルの漆工芸品を完成させて、対中国・朝鮮貿易に有力な特産品を提供した。新たな貝交易実現の歴史的意味は大と言わねばならない。これを可能にしたのは、交易開始前における螺鈿技術の修得と、螺鈿素材のヤコウガイ産地が南島（琉球列島）であるという情報である。この技術と情報は、空白期に準備された可能性がたかい。

正倉院⁹⁾に、この時期の螺鈿が伝えられている。正倉院の螺鈿といえは、華麗に装飾された琵琶や鏡が思いうかぶ。これら螺鈿製品を飾るヤコウガイ・トルコ石・ラピスラズリ・琥珀・瑠璃^{こはく・たいまい}は、イラン・アフガニスタン・東南アジア等の産物で、これが長大な交易ルートをもつ唐から、はるばる請来されたものであることを教えてくれる。この螺鈿に使用されている貝殻のほとんどがヤコウガイであることは、きわめて重要である（和田ほか1996）。こうした舶載品とは別に、国産品とみられる螺鈿琵琶・琴、あるいは国産の可能性のある、ヤコウガイを用いた帯¹⁰⁾・垂飾部品、さらにヤコウガイ貝殻そのものも、正倉院にはある。帯と垂飾部品は、献納目録である『国家珍宝帳』（以下『珍宝帳』）¹¹⁾に記載されていて、それに拠る限り当該製品が8世紀中頃以前に所属することは確かである。上記の琵琶と琴は、素材や形態によって国産品である可能性が高いとされ（成瀬・奥谷1996）、初期の国産螺鈿の実態を示している。8世紀中頃以前の国産かもしれぬ螺鈿や帯に使用されたヤコウガイが、南島産であったとただちにいえるわけでは、もちろんない。しかし、9世紀後半には始まっていた大和・南島間のヤコウガイ交易と、8世紀における関係の空白を考える時、正倉院のヤコウガイ製品は、空白期の両者の関係を検討する絶好の資料¹²⁾といえるのである。

本稿では、正倉院に伝わる国産品、あるいはその可能性のあるヤコウガイ製品を検討し、これを通して9世紀後半以降の南島貝交易がどのように実現したのかを論じたい。

具体的には、正倉院「赤漆文櫛木御厨子」^{せきしつぶんかんぼくのおんずし}内のヤコウガイを用いた帯について検討し、その国産品の可能性が高いこと、ならびにこの時期に天皇の帯をヤコウガイで製作した意味について論じる。次いで国産品とされる琵琶、琴に触れ、螺鈿技法が国産化される過程を整理し、これらに立脚して、9世

紀に、大和で南島産ヤコウガイを用いた螺鈿が生産されることになった歴史的契機を論じることしたい。

2. 「斑貝粘鞆御帯残欠」の検討

(1) 『国家珍宝帳』の記載と宝物の現状

『珍宝帳』に「斑貝粘鞆御帯一條」(北倉6)⁽¹³⁾と記されるものが、現存する「斑貝粘鞆御帯残欠」である(図2①)。ベルト本体や鉸具はすでに現存せず、丸鞆4枚、巡方1枚と鉈尾1枚の計7枚が残る。「斑貝」部分の現状は「黄褐色の地色に褐色の模様があり、深緑色部分と真珠層が露出している」(大賀ほか1957, p.58)。貝殻の種は1953～55年、1992～93年の2度にわたる材質調査⁽¹⁴⁾の結果、ヤコウガイと判断されている。「斑貝」(まだらの貝殻)という表現は、ヤコウガイの斑状の外見と矛盾しない。「丸鞆と巡方には波形の縞や筋が認められ、ヤコウガイの貝殻外側の稜柱層を巧みに模様に生かして用いたものと思われる」(和田ほか1996)。それぞれの大きさを表1に示す(奈良国立博物館1996, p.58から作成)。

表1. 「斑貝粘鞆御帯残欠」計測値 (cm)

	縦	横	厚さ
巡方	2.17	2.40	0.36
丸鞆	1.76	2.27	0.30
鉈尾	3.26	2.44	0.44

「粘鞆」とは「老木の身と皮との間にできる柔らかな質のもの」(皇室博物館1928、第二十図解説)で、「一種の菌で、獣皮の代わりに用いられる素材として珍重され、履の類にも使われた」高級素材である。「現状では座金と貝の間に少量確認できるだけである」(奈良国立博物館1996, p.58)。

「斑貝」の銙は、いずれも「粘鞆」を間にはさんで金銅製の裏金と対になっており、表面から4ないし5個の銙を打ちこんで互いを固定している。鉈尾には花卉形の金具が2ヶ所に残り、優雅な雰囲気留着している。残存する丸鞆・巡方には、懸垂するための方形の孔がみられない。『珍宝帳』は、この銙帯に二つの刀子が付属すると記しているので、実用機能を備えた有孔の巡方や丸鞆が他に伴い、これらを繋着していた可能性もあるが、薄手のヤコウ

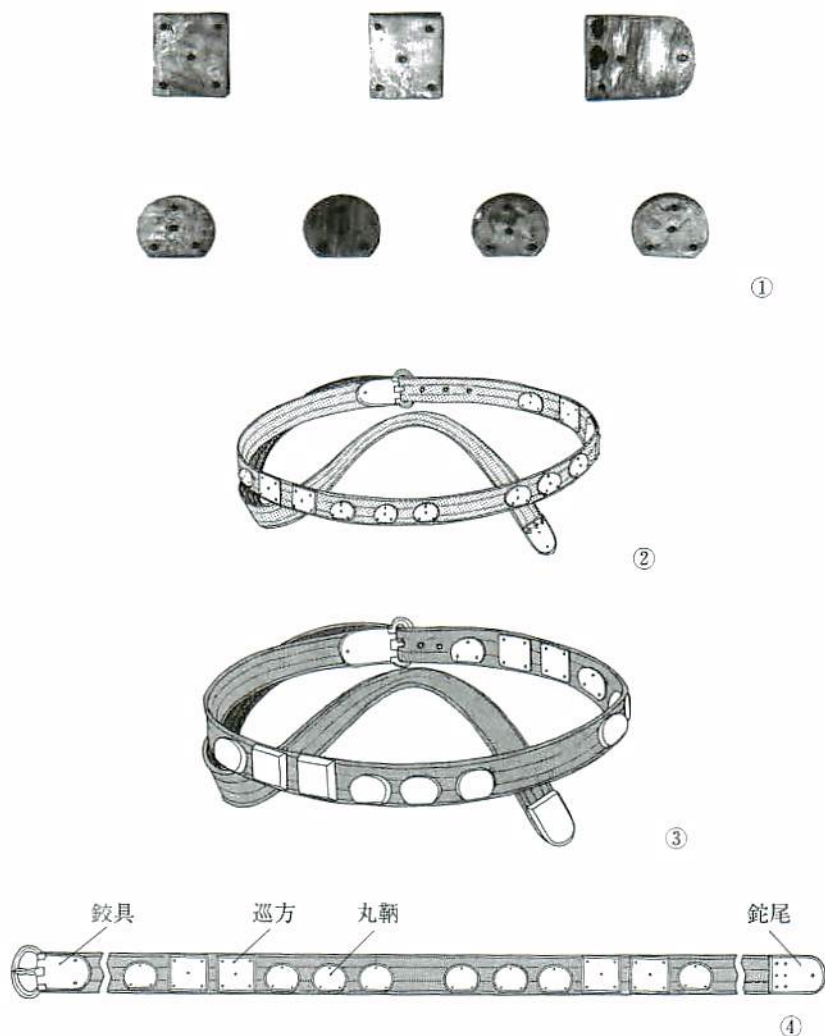


図2. 正倉院の帯

- ① 「斑貝鞆御帶残欠」(奈良国立博物館1996、p58引用)
- ② 「斑貝鞆御帶」推定図(木村2002図9を参照して作成)
- ③ 「斑犀偃鼠皮御帶」推定図(「紺玉帯」ならびに木村2002図9を参照して作成)
- ④ 帯(鈐帶)各部の名勝(木村2002図9により作成)

ガイ板をさらに加工するのは容易でなかっただろう（図2②）。

(2)由来

「斑貝鞆御帯一條」は、「赤漆文櫨木御厨子」に収納されていた。厨子とは身の回りのものを収納する家具であるという（米田1999、p.36）。この厨子は木目の美しい櫨（文櫨木）を蘇芳^{すおう}で赤く着色し、生漆を塗った（赤漆）総高100cm、42×85cmの収納具である。「赤漆文櫨木御厨子」は正倉院宝物の中で、特筆すべき意味をもつ。それは『珍宝帳』に、これが天武天皇から持統天皇に、次いで文武、元正、聖武の各天皇に伝えられ、聖武天皇から譲られた孝謙天皇が東大寺大仏に献納したものであることが明記されているためである。つまり、この厨子は天武直系の天皇家にとって、その家系を証明する極めて大事な伝世品であった⁽¹⁴⁾。

厨子内に収納されたのは、聖武天皇・元正天皇・光明皇后それぞれの書、王羲之の書、小刀1口、刀子42口、鈔^{かたい}帯2條、帯1條、笏3枚、撥鏤尺4枚、白牙尺2枚、犀角杯2口、双六道具、貝^{いっ}玦12個、念珠7具、百索鏤1巻、尺八5管である（竹内編1967による、下線はヤコウガイ使用製品）。

『珍宝帳』によってこれを記録順に示すと、聖武天皇宸筆『雑集』、元正天皇宸筆『孝経』、光明皇后御筆『楽毅論』ほか『王羲之書法』20巻、次に「金銀作小刀一口」、次に鈔帯「斑犀偃鼠皮御帯一條」とこれに伴う「御刀子六口」と「御袋一口」、次に鈔帯「斑貝鞆御帯一條」とこれに伴う「十合鞘御刀子一口」と「三合鞘御刀子一口」、次に條帯⁽¹⁵⁾「赤紫黒紫綵綬御帯一條」とこれに伴う袋、刀子が続き、以下順に笏、尺、杯、双六道具、貝玦、念珠、刀子、百索鏤、尺八が並ぶ。

つまり厨子納物の記載順序は、①書、②小刀、③帯一式、④笏、⑤儀式用具（尺）、⑥容器、⑦遊戯具、⑧貝玦、⑨仏具、⑩刀子、⑪まじないの具、⑫楽器となる。③帯や④笏は『養老衣服令』において礼服・朝服着用時の使用が定められているので（黒板1939）、天皇の儀式衣服セットとみていい。すなわちこれらは、書→儀式用具→日常生活の小物→宗教用具→楽器の順に並ぶ傾向があり、聖武天皇遺品にたいする光明皇后の価値観をゆるやかに示しているとみることができる。初めに記録されたものが後のものより、皇后

にとつての価値は高かったと判断していいだろう。ヤコウガイの帯は二番目のグループにはいり、記載の位置から判断すると、天皇遺品として高い価値が置かれていたといえる。

(3) 帯としての位置付け

納められた帯は3条である。筆頭の帯は「斑犀僊鼠皮御帯一條」で、「斑貝鞋襪御帯一條」はこれに続く位置付けである（図2③）。

「斑犀僊鼠皮御帯一條」について簡単に説明しておこう。現在革帯本体はすでになく、銀製の鉸具1、巡方4、丸鞆6が残存している。巡方と丸鞆の表面は黒斑ある犀角製で、半透明の飴色を呈し、裏金は銀板である。両者に挟まれて、モグラモチ製革ベルトの一部が残存している（帝室博物館1928、第二十図解説による）。斑角という素材からみても、また唐代に同様の鍔帯が普及していることからみても（中川2002）、これは舶来品であろう。

『新唐書』には、高祖が身分によって鍔帯の素材を区別したことが記されている。一品と二品は金、六品以上は犀、九品以上は銀、庶人は鉄である⁽¹⁶⁾。また『唐会要』と『旧唐書』には、上元元（674）年に、高宗が三品以上に金玉帯13個、四品と五品に金帯11個・10個、六品と七品に銀帯9個を定めた記録がある⁽¹⁷⁾。「斑犀僊鼠皮御帯」は『新唐書』六品以上の規定に符合するが、これが唐皇帝からの贈品なのか購入品なのかについての記録はない。聖武天皇が愛用し、帯の筆頭に配されていることを考慮すると、前者であった可能性が高い。金製でないのが残念なところである。

さて、ヤコウガイを使用した「斑貝鞋襪御帯」は「斑犀僊鼠皮御帯」に次ぐ位置付けである。前者の巡方と丸鞆は、後者の7割ほどの大きさしかなく、厚さにおいても前者は後者に及ばない。同様の鍔帯は当時の日本においても身分表示の道具であり、それが唐同様に鍔の素材において明確に規定されていることは、『養老衣服令』『朝服』で明らかである⁽¹⁸⁾。しかし、実際には、素材の他に鍔の大きさでさらに細かく分かれていたことが考古資料から指摘され、論議されてきた（佐藤1975、阿部1976、亀田1983、松村2002）。この区別は臣下にのみ適用され、天皇の衣服に及ぶことはないが、こうした大きさによる区別意識が大和の貴族社会にあったことを前提にすれば、「斑貝鞋

鞆御帯」が「斑犀偃鼠皮御帯」の後に記録されるのは、当然かもしれない(図2②③)。

(4) 舶載品の可能性

「斑貝鞆御帯」の最大の特徴は、ヤコウガイを使用する点である。これが唐製である可能性を、素材、技術において検討してみよう。「斑貝鞆御帯」の素材は、ヤコウガイ、鞆、金銅である。唐でヤコウガイ螺鈿が作成されたことは明らかなので、長安城内の工房にはヤコウガイそのものが当然存在していた。鞆はサルノコシカケ科の菌類で暖皮ともいい、1950年代の材質調査報告書では諸所で採取できるとする⁽¹⁹⁾。金銅についても問題はなく、「斑貝鞆御帯」を製作する材料は唐において揃っていた。技術面では、彎曲したヤコウガイ貝殻を平坦に研磨することが、他の帯作成技術と異なるものの、唐の細工職人が螺鈿作成に臨んでヤコウガイ平板を作成することは日常事であったはずである。素材、技術において「斑貝鞆御帯」が唐製であることに問題はない。

次にこれが唐製である必然性について検討したい。私は、「斑貝鞆御帯」が当時唐で高く評価された帯だったとは、必ずしも言えないのではないかと考えている。それは、貝殻製の鈿帯が唐の服飾規定に存在しないこと、「斑貝鞆御帯」の特異性が唐文化の嗜好から逸脱していることによる。

唐の服飾規定に貝殻製の鈿帯はみられないので、これを唐室からの公式な贈呈品とみることは困難であろう。一步ゆずって、仮に日本の天皇用に敢えて製作された珍品であったとしよう。ヤコウガイは当時の唐では間違いなく高級素材である。しかしそれは他の材質で代用できないヤコウガイの真珠光沢が生かされてこそその評価である。「斑貝鞆御帯」のヤコウガイは厚さ3～4mmに磨きこまれた結果、真珠光沢の多くは失われている。上質で厚手の玉や金属がその材質美を競う帯装飾に、真珠光沢をアピールするでもない薄い素材が使用されているのである。当時の唐人の美意識をもって、彼等がこうした装飾に価値を認めたとは考え難い。真珠光沢の多寡にこだわらず、しかも素材が白色であることに意味があったのだとすれば、中国人ならば淡水産の蚌^{はう}を使用するはずである。蚌は中国で古来玉の代用として使用されてき

ており⁽²⁰⁾、螺鈿素材の主流がヤコウガイになるはるか以前の主要な素材でもあった（荒川1985、pp.229～231）。蚌は種類が多く、厚さも十分確保できる優良な素材である。しかしそれが中国に普遍的であることから、中国における素材としての価値は決して高いものではない。敢えて蚌を使用するくらいなら白玉^{はくぎょく}を用いるのではないだろうか。玉は唐の服飾規定においても最高位にあり、これこそ日本の天皇に贈る素材としてふさわしい。事実唐代貴族が使用した見事な白玉帯の実物が発見されている⁽²¹⁾。こうした中国の帯に比べると、「斑貝鞆御帯」は、余りに繊細なのである。「斑貝鞆御帯」が唐において作成された可能性は極めて低い、と私は考えている。

(5) 国産品の可能性

「斑貝鞆御帯」が国内で作成された可能性を検討しよう。

当該帯は7世紀後半から8世紀前半に属している。当時の日本では中国に習い、すでに多様な鍔帯を使用していたことが文献においても考古資料においても明らかなので、金属素材、技術について問題はない。暖皮も国内に存在する。問題はヤコウガイである。

現在、ヤコウガイが大和に登場する最もはやい時期は、大嘗祭に臨んで「夜久貝^{よみ}壺杯八口」が使用されたとする『貞観儀式』の9世紀後半である。正倉院の「斑貝鞆御帯」が舶載品でないとすれば、ヤコウガイはこれより少なくともさらに1世紀遡って大和に届いたことになる。

8世紀、ヤコウガイを大和にもたらすことのできる二つの可能性があった。一つは遣唐使が唐から螺鈿素材としてヤコウガイを持ちかえていた可能性、他は南島から大宰府経由で皇室に献上された可能性である。前者については後述するので、ここでは後者について、その可能性の根拠をのべよう。それは以下のような：

- ① 8～9世紀に大和（大宰府）の役人が、奄美大島、喜界島に赴き、また大宰府に南島の貢納品が届けられていることを、考古学資料が示している（池畑1994、1998、木下2002）。
- ② 南島においてヤコウガイの使用は普遍的であり、ことに7世紀前後、奄美大島にはこの貝殻のみを集中的に使用する遺跡が登場する（高梨2000、木

下2000、図1④)。

③ 7～9世紀に琉球列島は、唐にヤコウガイを提供する原産地の一つであった可能性が高い(木下2000)。

③の仮説が成立するとしよう。奄美諸島に到達した役人は、ヤコウガイが島外との交易品としてさかんに採取されていることを知ったはずである。ただこれが唐の工房で螺鈿のための素材として価値をもっていたことまで理解していたかどうかは不明であるし、島人もこれを知ってヤコウガイを交易していたかどうかはわからない。しかし大和の役人はヤコウガイを含めて南島の赤木や珍しい物産を大宰府に持ちかえったであろうし、それがさらに宮都に運ばれたとしても不思議でない。

つまり「斑貝鞆御帯」のヤコウガイが、唐あるいは南島のどちらのルートで大和に齎されてもよい歴史状況が8世紀に存在したのである。

皇室は、なぜ唐にも類例のないヤコウガイ製鈿帯を取って製作したのだろうか。ヒントは帯の素材に対する隋唐貴族の価値観にある。唐では上元元(674)年に、三品以上に金玉帯の着用を定めていて、玉自体に高い評価を与えている。遡って隋代には「天子白玉、太子璫玉、王山玄玉、自公以下皆水蒼玉」という等級があり、この基準が唐、五代にわたって踏襲されたという(楊1993)。つまり唐では、白色の玉こそ最高の素材だったのである。正倉院にはほかに見事なラピスラズリの「紺玉帯残欠」(中倉88)⁽²²⁾が1条あるが、隋代の玉の評価に対応させるとさほど高位の玉帯ではなさそうである。先述した「斑犀偃鼠皮御帯」を含め、正倉院には唐最高位の白玉帯は齎されていない。天皇家は白玉帯を必要としたのではないか。

注意したいのは、貝が玉質に通じ、中国でもしばしばその代替品であった事実である。白玉は日本に産出しないので、その代用として白色で艶のある貝殻が候補にあがったとすれば理解しやすい。製作にあたっては最大の付加価値がつけられ、その結果取って希少なヤコウガイと希少な菌類が素材に選ばれたのではないだろうか。彎曲しているヤコウガイの殻を水平に擦り落とした結果、本体の厚さは3mmになってしまうが、裏金や留め金には最高位の素材である金を使用して、唐の白玉帯に相当する帯とした、とみるのは想像が過ぎるだろうか⁽²³⁾。「斑貝鞆御帯」は、日本国内にのみ通用する、天皇

専用の中国式ベルトであったと、私には思える。舶載品である可能性より、国産品である可能性の方が高いと考えたいのである。

(6)小結

- ・「斑貝鞋襪御帶」はヤコウガイを用いた唐様式の帯で、聖武天皇愛用の品であった。
- ・当該品は遺品の中でも高く評価されており、舶載された「斑犀偃鼠皮御帶」の次に位置付けられている。
- ・当該品は、唐高官の着用する白玉帯に相当するものとして、天皇専用に国内で製作された可能性が高い。
- ・素材のヤコウガイは、8世紀前半に、唐で購入されたものが大和に届けられていた可能性もあるが、琉球列島産ヤコウガイが大和に届けられていた可能性も同様にある。

3 正倉院の国産螺鈿

(1)「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」と「檜和琴」

正倉院には、国産品とみられる螺鈿製品が2点伝えられている。一つは「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」で、もう一つは「檜和琴」である。2点とも南倉に伝存するもので、東大寺銘をもち、華麗な装飾が施されている。これら2点は、いずれも『珍宝帳』に記載されている品ではないので、製作年代を特定できない。しかし8世紀から10世紀間に納まることに変わりはない。宮内庁正倉院事務所等によって実施された調査・研究成果に基づき、とくに国産品の判定にかんして明らかにされたことを以下にまとめよう。

「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」(南倉101-1) (図3)

四弦四柱の琵琶で、背面(遠山部)に「東大寺」銘をもつ。これが国産品とされるのは以下の理由による：

- ① 正倉院に伝わる5面の四弦琵琶のうち、4面は紫檀材を用いるのに対し、これのみ楓を使用している。楓は国内に産する材である(貴島ほか1981、p.15)。
- ② 正倉院に伝わる螺鈿製品の中で、これのみにヤコウガイとマダカアワビ

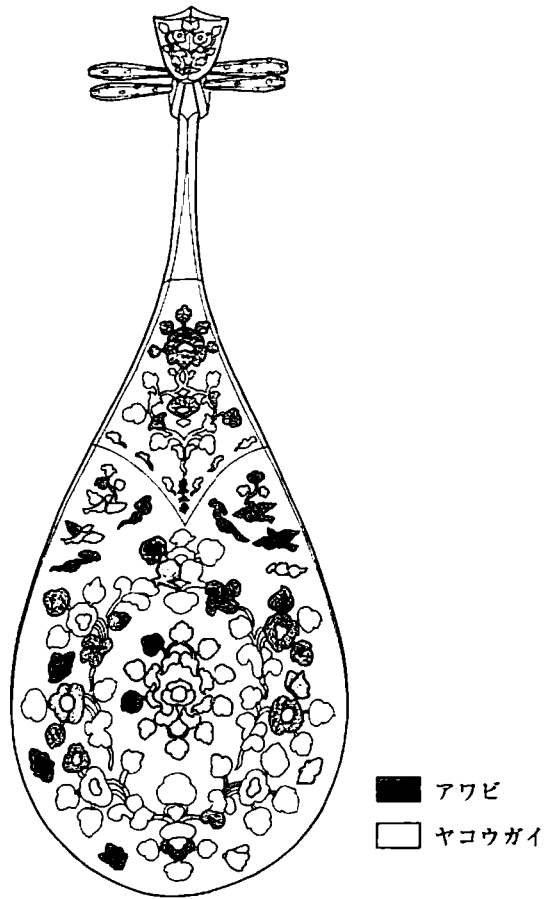


図3.「楓蘇芳染螺細槽琵琶」

(成瀬ほか1996巻頭カラー図版、ならびに和田ほか1996図2をもとに作成)

Nordotis madaka Habe が併用され、その割合は 3 : 7 である。マダカアワビは国内に産する貝である（和田ほか1996、p.11、図3）。

- ③ 撥面（^{かんぱら}棹撥）に描かれた絵の下地に「倭胡粉」（擬似鉛）が使用されている可能性が高い。「倭胡粉」は日本固有の白色顔料である（成瀬1999）。
「檜和琴」（南倉98）

六弦の琴で、上の音穴の下に「東大寺」の象嵌銘がある。国産品とされるのは以下の理由による：

- ① 和琴（倭琴）は日本古来の楽器であり、その形状から国産であることは疑いえない（奈良国立博物館1997、pp.49）。
② 主用な素材はヒノキ、ホオノキ、トネリコ属、イスノキで、これらは全て国産の素材である（貴島ほか1981、pp.13～15）。

(2)二品からみた螺鈿国産化の背景

日本における螺鈿は、正倉院の技法から出発して10世紀には木地螺鈿、黒漆螺鈿に進展することが、荒川浩和、中里壽克らの研究ですでに明らかにされている（荒川1985、中里1995）。ここでは南島のヤコウガイが、螺鈿国産化にどう関与したかを検討するために、貝素材の調達と螺鈿技術の獲得に注目して、これまでの研究成果を整理しよう。

1) 素材の獲得

上に述べた二つの製品は、素材や形状から判断して、国内で製作された可能性はきわめて高い。注意したいのは、大半の国産素材と同時に、一定量の舶載素材も使用されていることである。「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」の琵琶本体を赤く染めたのは国内に産出しない蘇芳である⁽²⁴⁾。琵琶先端部（^{ししくび}鹿頸と^{えび}海老尾）には紫檀と黄楊が用いられ、装飾には瑠璃が使用されている。紫檀、瑠璃は舶載された素材である⁽²⁵⁾。「檜和琴」の一部には紫檀が、装飾には瑠璃とヤコウガイ、象牙、金、銀が使用されている（荒川1998、p.17）。琵琶や琴の製作にあたって、こうした素材がすでに皇室あるいは東大寺の工房に整えられていたと考えざるをえない。

東野治之によれば、当時皇室の調度品その他の生産は、内匠寮という令外の官が掌握していたが、762年ごろさらに勅旨省が設置され、天皇財産の管

理や各種贅沢品の調達をおこなっていたという。その末端には各分野の工人が抱えられ、生産に応じる能勢も整っていたとされる。東野は、勅旨省は「海外製品を輸入・選別し、これを国内での生産に結びつけるというところに新しさを備えていた」と述べている（東野1999、pp.148～152）。

螺鈿製品製作のための紫檀や瑠璃、ヤコウガイ貝殻等の高級素材が唐で買付けられ、皇室に搬入されていた可能性がある。国産螺鈿が誕生する物質的条件は、整えられていた。

2) 技術の学習

正倉院の代表的な螺鈿技法には、以下の4種類があるとされる（荒川1985、1998）：

- ① 木地螺鈿：木地に模様を彫込み、同文の貝片を嵌込む。木地の多くは紫檀。例：琵琶、琴。
- ② 平螺鈿：黒色のラックに、貝片、琥珀、瑠璃等を装着し、トルコ石、青金石の碎片を空間に埋め、全面を平滑に仕上げる。例：鏡。
- ③ 瑠璃貼螺鈿：瑠璃地に模様を彫込み、同文の貝片を嵌込む。例：八角箱。
- ④ 黒漆螺鈿：木地に模様を彫込み、同文の貝片、琥珀、銀線等を嵌込み、下地を施して黒漆で塗りこめ、模様部を剥ぎ取る。例：玉帯箱。

これらのうち①は楽器、②は鏡、③と④は容器にみられる。国産化の対象となったのは①である。古来鏡への愛好ひとかならぬ大和人がここで②を選ばなかったのは、材料の多様さと文様割り付け等の技術的制約によるのだろうか。③の製作は、素材の獲得に困難が大きい。④は後発の技法とみられる。

「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」を実見した荒川浩和は次のような指摘している（荒川1998、p.18）：

- ・ヤコウガイとアワビの配置には規則性が認められず、装飾効果を考慮したとは考えられない。
- ・貝片と木地とは同一面でなく、高低差がある。
- ・貝片と木地の間隙は比較的少なく、黒色の充填物が認められる。

この琵琶を製作した工人は、螺鈿素材による装飾効果への配慮と、表面を平滑に仕上げる技術に欠けていたが、貝片は木地にわりとよく嵌込まれている。

た、というところだろうか。しかしこうした技術を、専門技術者の指導もなく、内匠寮や勅旨省の工人たちが修得できたとは考えがたい。日本の工人が、渡来した唐僧の、たとえば鑑真や義空らに伴ってきたかもしれない唐の仏師と接触した可能性はないだろうか。鑑真は僧侶らを24人伴ってきている（安藤1960、p.280）。また、新羅人を通して技術を修得したかもしれない。新羅人は唐文化を格別熱心に吸収し、日本との往来も頻繁であったからである。螺鈿技法の修得は、実際にはさまざまな渡来人との接触によって果たされたのであろう。

(3)小結

- ・「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」と「檜和琴」は、素材、形状において、日本国内で製作された最初期の螺鈿とみられる。
- ・日本が修得しようとした螺鈿技法は木地螺鈿であった。
- ・螺鈿国産化は、技術移植を意図した内匠寮や勅旨省の設置、唐経由でもたらされた瑠璃・紫檀・ヤコウガイ等の存在、渡日した仏教関係者等による技術指導、これらが総合されて実現したとみられる。

4 螺鈿国産化とヤコウガイの需要

(1)螺鈿国産化の時期

8世紀の大和中枢部では、ヤコウガイを素材にした天皇の帯や、螺鈿装飾を施した楽器が製作されていた。92～93ページでのべたように、この時期のヤコウガイには、二つの由来地を想定することができる。一つは、大宰府を経由した南島であり、もう一つは唐である。前者は、奄美諸島に達した役人が、島人がさかんに採取・加工していたヤコウガイに気付き、またその素材としての珍しさからこれを持ち帰ったとする想定である。後者は、遣唐使がヤコウガイを含む螺鈿製作用素材一式を唐で購入し、遣唐使船で持ち帰ったとする想定である。当時唐では螺鈿を「寶鈿」と呼んでいたことから（荒川1998、p.5）、唐におけるタカラガイには、かなり高い値がついていたであろう。

「斑貝鞆御帯」を最古の国産ヤコウガイ製品とみる先の仮定を前提とし

よう。この時大和の工人たちはすでに螺鈿を製作していただろうか。そうであれば、彼らはヤコウガイのもつ光沢や、層状に割れる貝質、研磨によって変化する色彩などの特質を掌握していたはずである。しかし、「斑貝鞆御帯」をみる限り、ここに螺鈿に共通する研磨技術や美意識を認めることはできない。ヤコウガイはひたすら平らに磨かれ、貝層のまだらを露にしている。8世紀前半に推定される「斑貝鞆御帯」の背後に螺鈿技術の定着を推定するのは困難といわざるを得ない。国産化の試みは、むしろ、国家の一大行事であった大仏開眼供養（752年）を契機に、多くの楽器や調度品が整えられる中で実現したのであろう。そうであれば、螺鈿国産化は、「斑貝鞆御帯」にやや遅れる8世紀半ばから後半にかけて実現した可能性が高いといえる。

(2)ヤコウガイ需要と南島

「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」は、螺鈿国産化初期の工人たちが、希少品であったヤコウガイを使用し、その不足分を国内の類似貝（アワビ）で補っていた状況を伝えている。8世紀のヤコウガイ導入について先に二つの可能性を示したが、国産初期のヤコウガイは唐において他の螺鈿素材とともに購入され、大和に運ばれた貝殻であった可能性の方が高い、と私は見ている。南島産だった可能性も否定はできないが、それをとらないのは、当時南島産ヤコウガイが大和に届いていたとしても、これを朝廷に献上する役人たちが、これを螺鈿素材として認識し、最終的にしかるべき工人に届けたかどうか疑問だからである。南島のヤコウガイと唐のヤコウガイが同じ螺鈿素材であることに気付けるのは、おそらく製作にかかわる人々だけであるが、そのためには、南島のヤコウガイと唐のヤコウガイが彼らの前に、由来の異なるものとして同時に存在していなければならない。そういう状況が不可能であったとは勿論いえないが、その前提や可能性を理屈で整えるのは容易でない。

では、南島のヤコウガイと、螺鈿素材としてのヤコウガイは、歴史的に説明可能な「いつ」結びつくのだろうか。文献によると、南島のヤコウガイが大和に初めて登場するのは9世紀後半である⁽²⁶⁾。文献には祭祀用の杯として記録されているが、螺鈿の国産化が、先の想定のように8世紀後半であったとすれば、当時の役人や工人はすでにヤコウガイをよく認知していたはずで

あり、祭祀用ヤコウガイ杯の背後には、国産螺鈿の存在が当然想定される。9世紀後半には南島のヤコウガイが螺鈿素材になっていたと考えてよい。南島のヤコウガイが国産螺鈿に連結する時期は、したがって、その前段を含めて9世紀とみていいだろう。

9世紀、大和が南島からヤコウガイを入手していたという想定を支持する資料がある。沖縄本島那^な崎^{さき}原遺跡が発掘調査された結果、ここからイネ、オオムギ、コムギ、アワ、マメ、畑雑草を伴う9～10世紀に属する畑が検出され、これに在地の土器と「本土産須恵器」、土製勾玉が伴っていた（那覇市教育委員会1996）。遺跡は明らかに、大和系統の農耕が南下し定着したことを示している。つまり9世紀を前後する時期に、大和から、農耕を定着させるほど頻繁な人々の来島があったと考えられるのである。9世紀、大和に南島のヤコウガイが恒常的にはいていた可能性は高い。

5 螺鈿交易の開始

唐を介さずに螺鈿素材を入手できるようになった大和の人々は、この発見を喜んだに違いない。では、9世紀の大和の工人に、南島のヤコウガイが螺鈿素材であることを認識させた歴史的契機は何だったのか。それは、この時期における大和のヤコウガイ不足にあっただろうと、私は考えている。9世紀前半、遣唐使が事実上廃止され、中国との往来が、唐商人による私貿易に委ねられるようになると、螺鈿素材の入手環境も大きく変化したはずである。しかし続く10世紀に紫檀地螺鈿や黒漆地螺鈿が存在⁽²⁷⁾し、大和の螺鈿工芸が順調に発展していたことを考慮すると、9世紀において国産螺鈿が衰退したとは考えがたい。螺鈿素材の入手は継続していたはずである。

螺鈿素材として重要なのは、紫檀とヤコウガイである。紫檀は日宋貿易でも日本に輸出されたことがわかっており（土橋1997）、遡る9世紀も同様であったと推測される。しかし、中国からの貿易品目に登場しないヤコウガイはその限りではない。もとよりヤコウガイは、中国にとっても輸入品だからである。中国からヤコウガイを入手できなくなった際、大和はこれを探し、大宰府を介して南島のヤコウガイをみつけたのではないだろうか。私には、このように考えるのが今のところもっとも矛盾がないように思える。また、

こうした具体的で強烈な動機が存在しなければ、すでに遣唐使航路としての意味も薄れ、政治的に異郷となっていた（木下2002）9世紀、南島の文物が大和中央部に突然登場することを、説明し難いのである。国産化した螺鈿生産を存続させるには、素材であるヤコウガイの確保が必須である。大和がきわめて目的的に南島にこれを探し、発見したことが、南島産ヤコウガイ輸入の契機であった、と考えておきたい。

こうして螺鈿製作の需要から大和に届けられるようになったヤコウガイは、おそらく未加工の貝殻がそのまま都に登場し、多くは螺鈿に消費され、その形状や輝きの美しさから儀式の容器にも使われるようになり、新しくめずらしいものとして9世紀後半の記録にも記されることになったのだろう。

(3)小結

南島交易の再開について論じた内容をまとめると、以下のようになる：

- ・ 8世紀前半、大和中枢部ではヤコウガイを使用した天皇用帯が製作された。素材のヤコウガイは南島もしくは唐から齎された。これを製作した大和の工人は、ヤコウガイ特有の真珠層の美しさを未だ意識していなかった。
- ・ 8世紀後半、唐螺鈿を模倣した螺鈿が、国内で製作された。木材や装飾用素材は国産品と唐からの舶載品を併用し、ヤコウガイも舶来品であった可能性が高い。
- ・ 9世紀、国内外の素材による国産螺鈿は順調に発展・定着するが、遣唐使が廃止に向う中、材料の入手に支障をきたし、南島のヤコウガイが螺鈿素材として意図的に発見される。やがて南島から大和に齎されるヤコウガイが増え、螺鈿のほかに儀式用杯などにも使用される。
- ・ 10世紀以降、豊富なヤコウガイ供給を背景に、国内の螺鈿は順調に発展する。

おわりに

正倉院南倉にはヤコウガイが1個伝存している。「櫃第206号櫃納物」で、櫃内に椰子実とともに収納されている（正倉院事務所編1998）。貝殻はやや大型で（15.8×15.2cm）殻口端部が欠け、写真では老成したもののようにみ

える⁽²⁸⁾。他の宝物と同様8世紀のものであれば、遣唐使に唐で買い付けられて運ばれたもの、もしくは大宰府経由で届けられた南島の貢物であろう。天曆4(950)年に絹索御双倉から南倉に移された品であれば、9～10世紀に南島で採取され、商人を介して東大寺に持ちこまれた螺鈿素材の可能性がある。

じつは、正倉院螺鈿に使用されたすべてのヤコウガイについて、南島産の可能性があると、私は考えている。先年琉球列島の開元通宝からヤコウガイ交易を論じて、唐の螺鈿素材そのものが南島のヤコウガイだった可能性が高いという結論に導かれたからである(木下2000)。もし、この推定のようにあったならば、1300年前から200年にわたって大量に採取されたであろう南島産ヤコウガイは、あるいは黒潮によってそのまま大和に至り、あるいは東中国海を西に越えて長安の市場で売られ、あるいは唐工人の手で瑠瑯やラピスラズリとともに鏡や琵琶を華やかに飾った末に、ともに遣唐使船で大和にもち帰られ、はるばる正倉院で邂逅したことになる。シルクロードの終着点の、もう一つの話である。

小稿をまとめるにあたって、2002年に奈良文化財研究所から刊行された『鍔帯をめぐる諸問題』から得た恩恵が大きかった。正倉院のヤコウガイについては、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に、暖皮については熊本大学理学部高宮正之氏にそれぞれ教示を賜った。末筆ながら記して謝意を表したい。

註

(1) 「やまと」は、沖縄から、広義に日本本土を指す言葉である。江戸時代には幕府をさして「大やまと」といい、それ以前には薩摩を指して「やまと(大和)」とよんだ(渡口1983)。ここでは「南島」に対峙する用語として「大和」を使用する。

(2) 南島は、『続日本紀』文武天皇2(698)年に、種子島、屋久島、吐噶喇列島、奄美諸島を指す地域総称として登場した歴史的用語である。その包括する範囲は時代とともに拡大し、最終的に現在の琉球列島と重なる。現在では琉球列島の文化や歴史的事象を扱う場合に多く使用されている。

(3) ゴホウラ *Tricornis latissimus* (Linnaeus) は、スイショウガイ科の大型巻貝である。サンゴ礁の水深10mくらいのところに棲む。紀元前3世紀、北部九州の弥生人は、これを加工して特徴ある腕輪を作り珍重した。この習俗が西日本の弥生文化に普及したことから、その需要を充たすために、琉球列島と九州を結ぶ海上交易が行なわれるようになった。

(4) イモガイ *Conidae* は、イモガイ科の総称である。サンゴ礁の浅海に棲む。この中で大型のアンボンクロザメ *Lithoconus litteratus* (Linnaeus) は、ゴホウラと同様、腕輪の素材として、弥生時代以降、琉球列島から九州・西日本に多く産された。

(5) ヤコウガイ *Turbo (Lunatica) marmorata* (Linnaeus) は、リュウテンサザエ科の大型巻貝である。外海に面したサンゴ礁域に多く棲む。殻は厚く真珠光沢をもち、これが螺鈿工芸に利用されてきた。

(6) 螺鈿とは、貝片を模様切に切って、木地や漆面に装着する技法をいう(荒川1998,p.2)。

(7) ホラガイ *Charonia tritonis* (Linnaeus) は、フジツガイ科の大型巻貝で、大きさにおいて国内最大の貝である。サンゴ礁の浅海に棲む。東アジアでは古来、仏教の法螺として珍重されてきた。

(8) それぞれに例外が1例ある。山口県萩市見島のジューコンゴ古墓では9~10世紀の墓にとまってイモガイ製品がみつかった(見島総合学術調査団1964)。また鹿児島県枕崎市松之尾遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の包含層でヤコウガイの破片(腕索部分)がみつかった(戸崎勝洋ほか1981)。

(9) 奈良東大寺の宝庫。天平勝宝8(756)年6月21日、光明皇后が聖武天皇の七七忌に、聖武天皇遺愛の650点余と、薬物60種を東大寺本尊に奉献した。その後同年10月まで5回にわたって宝物が献納され、これらが献納の目録「東大寺献物帳」とともに伝えられている。宝物は校倉造の宝庫に収納され、これが現在の正倉院となっている。宝庫は北中南の3室に分かれ、収納は以下のようであった：

北倉：聖武天皇遺愛の品々と光明皇后に縁の宝物

南倉：東大寺大仏開眼会で用いられた装束、仏具、楽具、皇室関係法要に使用された仏具

中倉：東大寺の儀式関係品、文書、造東大寺司関係の物品

これらのほとんどは奈良時代に東大寺に納められたという。その後950年に、東大寺関係の仏具・什器類が隅索御双倉から南倉に移納され、宝物となった(木村1999)。

(10) 役人が朝服着用時に使用する金具付き革ベルトを一般に鈿帯という(図1)。革ベルトには金属製の板が多数とつりつけていて、この板を鈿という。鈿帯はもともと唐の服制によって674年に使用法が定められたもので、日本では『養老衣服令』朝服条に初めてとり入れられ、公的には8世紀中頃以降普及したとされる(高島2002p.29)。日本での使用は、位階によって鈿の材質が異なり、身分表示の役割をもっていたことがわかる。鈿は革の表と裏からベルトの革をはさんで紙で固定されている。その形にはよく彫らんだ半円形(丸柄)と方形(逕方)があり、これを規則的にベルトに廻らす。鈿は本来物を懸垂するための機能をもち、底辺近くに横長の長方形の透かし孔を穿つ。これに合わせて革ベルトにも孔をあけ、ここから銀を下げて、これに刀子や袋をとりつけるのである。しかし、こうした孔がなく鈿が単なる飾りになっているものもある。革帯にとりつけられる金属は、鈿のほかに、留めの鈿具、反対の先端にとりつける鉤尾がある。なお、表面の金属部分を石や玉に替えたものを石帯、玉帯とよぶ。

(11) 東大寺献物帳と総称される5通の文書の一つで、光明皇后が天平勝宝8(756)年6月21日に東大寺本尊に奉献した聖武天皇遺愛の650点余の目録。

(12) 宮内庁では伝来の品々を宝物として扱い、一般の文化財とは表現を区別しているようであるが、本稿では一般の文化財と同様の表現を用いることにする。

(13) 正倉院の宝物には、「正倉院御物目録」にしたがった倉別番号が付されている。資料を特定するための基本番号である。

(14) 正倉院の材質調査は非破壊によることが条件である。2回目の調査は①肉眼観察、②マイクロウォッチャーによる拡大観察、③紫外線照射による蛍光観察によって材質を判断している。

- (15) 『養老衣服令』 礼服において規定されている帯。正倉院の組帯はこれに相当するものとされる（奈良国立博物館1998, p.58）
- (16) 『新唐書』 卷二十四「車服志」による。
- (17) 『唐会要』 卷三十一「章服品第」、『旧唐書』 卷五「高宗本紀下」
- (18) 『養老衣服令』 「朝服」において、一品以下五位以上は「金銀装腰帶」、六位以下は「烏油腰帶」と定められた。
- (19) 「多孔菌類の Fomes 属、Polyporus 属等の仮柔組織は Amadou（英、仏）、Pilzleder（独）、暖皮、間皮、吉膜、吉莫（中国、日本）とも称し、書物の表皮、砥石、袋、火口等に使われた。現今も諸所で採集できる。」（大賀ほか1957, p.69）。
- (20) 例えば山西省南部の天馬・曲村の西周墓では、玉製の魚形品や鳥形品、泡（扁平な半球形の装飾的留具）などがしばしば蚌製品で代替されている（難2000）。陝西省張家坡の西周墓では、本来玉製であるべき龍、蟬、蛙などの小品が蚌製品で代替されている（中国社会科学院考古研究所1999）。
- (21) 中国でも玉製帯の発見は多いわけではないが、有名な例がある。1970年、西安南郊何家村で二つの甕に納められた千余点の唐代文物が発見され、中に銀葉盒に納められた5組以上の白玉帯が含まれていた（陝西省博物館ほか1973）。この場所は玄宗皇帝のいとこ邠王李守礼の邸宅で、これら文物は、755年の安祿山の乱で皇帝以下貴族たちが蜀に避難する時に穴埋めしていった財宝だとされる（東野1999, p.124）。これらには見事な彫刻をもつ一式があり、当時最高の銙帯の風格を見ることができる（文物出版社1972、楊伯達編1993）。また西安西郊三橋鎮の唐墓からも白玉帯が出土している（王自力ほか1992）。
- (22) 黒漆塗りの牛革に丸釦7、巡方3がめぐる。国内に現存する唯一の例で、正倉院蔵玉帯中の最高級品とされる（奈良国立博物館1999, p.30）
- (23) このほか、「赤漆文櫛木御厨子」に収納され、「斑貝粘鞆御帯」と同様に天皇の愛用品とみられる「貝映拾二箇」がある。残念なことに実物が伝えられていない。中倉に「貝映、貝現」がそれぞれ8個と5個伝存し、これがすべてヤコウガイ製品であることから（荒川1985, p.203, p.206）、「貝映拾二箇」も同様であったと推測される。それぞれに小さな孔が複数個あいており、連結して垂下するための装飾用小道具だったようである。あるいは、「斑貝粘鞆御帯」を作成した残りのヤコウガイで造ったものだったかもしれない。陝西省賀若氏墓において発見された金銀宝玉頭飾に、正倉院の貝映に共通するデザインの小型の貝製垂飾があり、参考になる（新潟県立近代美術館ほか1999, p.156）
- (24) 蘇芳は熱帯アジア産のマメ科の低木で、心材を煎じた汁で赤紫色に染める（奥山1972, p.467）。
- (25) タイマイは国内では琉球列島にわずかに生息するのみで、恒常的に産卵上陸がみられるのは、八重山諸島遠以南であるが稀だという（内田1991, p.7）。紫檀はインドおよびスリランカ原産のマメ科の高木。材は堅く、心材が暗紅紫色を帯びる（奥山1972, p.283）。黄楊については資料を見出していない。
- (26) 871年から872年に、踐祚大嘗祭でヤコウガイをナマスの杯に使用したことが、「貞観式」に記録される。
- (27) 『仁和寺御室御物實録』による。藤原文時等によって天曆4（950）年に成ったもの。
- (28) 最近このくわしい写真を見る機会があった。それによると銚口にゴカイの付着した痕跡が明瞭で死んだ貝が採集されたものである可能性が高い。ヤコウガイ貝殻として上品とは言い難いようである。

参考文献（五十音順）

日本

- 阿倍義平1976『鈔帯と官位制について』『東北考古学の諸問題』東北考古学会、pp.325～344
- 荒川浩和1998『正倉院の螺鈿—漆芸史上の意義—』『正倉院紀要』第二十号、pp.1～39
- 荒川浩和1985『螺鈿』同朋社
- 安藤更正1960『鑑真大和上伝之研究』平凡社
- 池畑耕一1994『鹿児島県・宮崎県・沖縄県』『日本土器製塩研究』青木書店、pp.337～346
- 1998『考古学資料から見た古代の奄美諸島と南九州』『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』渡辺誠先生還暦記念論刊行会、pp.733～743
- 内田至1991『正倉院宝物の海ガメ類材質調査報告』『正倉院年報』第十三号、pp.1～20
- 大賀一郎ほか1957『昭和28～30年正倉院御物材質調査』『書陵部紀要』第8号、宮内庁書陵部、pp.57～81
- 奥山春季1972『すおう蘇芳』『平凡社世界大百科事典』16巻p.467、「したん 紫襖」同前13巻p.283
- 亀田博1983『鈔帯と石帯—出土鈔・石鈔の研究ノート』『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念』pp.367～416
- 木下尚子1996a『南島貝文化の研究』法政大学出版局
- 1996b『「白法螺一口」考—空海請来品の一検討—』『文学部論叢』第50号、熊本大学文学会、pp.95～123
- 1996c『南島交易ノート—古代・中世における法螺とホラガイの需要—』『東アジアにおける社会・文化構造の異化過程に関する研究』平成6～7（1994～95）年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書、pp.～57～88。
- 2000『開元通宝と夜光貝』『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』上巻、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp.187～219
- 2002『貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—』『先史琉球の生業と交易』pp.117～144
- 木村泰彦2002『銅鈔から石鈔へ』『鈔帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部pp.129～140
- 木村法光1999『皇室の名宝 正倉院北倉』週刊朝日百科01
- 黒板勝美編『新訂増補国史大系第二十二巻』
- 小島環穂1990『海上の道と華人文化』『海と列島文化』5、小学館、pp.139～194
- 米田雄介1999『正倉院の歴史』『正倉院学ノート』朝日選書623、pp.3～20、朝日新聞社
- 佐藤興治1975『F 金属器』『奈良国立文化財研究所学報第23冊 平城南や発掘調査報告VI』pp.154～161
- 正倉院事務所1998『正倉院宝物9 南倉Ⅲ』毎日新聞社
- 高島英幸2002『文献資料からみた日本古代の鈔帯』『鈔帯をめぐる諸問題』、pp.27～36
- 高梨修2000『ヤコウガイ交易の考古学—奈良・平安時代併行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会—』『交流の考古学』同成社、pp.228～265
- 竹内理三編『寧楽遺文中巻』pp.433～458帝室博物館1934『正倉院御物図録第七輯』
- 土橋理子1997『日宋貿易の諸相』『考古学による日本歴史 10対外交渉』pp.61～76
- 帝室博物館1928『正倉院御物図録第一輯』
- 帝室博物館1934『正倉院御物図録第七輯』
- 東野治之1999『遣唐使舟—東アジアのなかで』朝日選書
- 渡口真清1983『やまと』『沖縄大百科事典 下巻』pp.749～750

- 中川あや2002「中国出土の腰帯具」『鈐帯をめぐる諸問題』pp.105～128
- 中里壽克1995「古代螺鈿の研究（上）」『国華』第千百九十九号，pp.3～22
- 那覇市教育委員会1996「那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—」
那覇市文化財調査報告書第30集
- 奈良国立博物館1996「平成八年 正倉院展目録」
- 奈良国立博物館1997「平成九年 正倉院展目録」
- 奈良国立博物館1998「平成十年 正倉院展目録」
- 奈良国立博物館1999「平成十一年 正倉院展目録」
- 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部2002「鈐帯をめぐる諸問題」
- 成瀬正和1999「鉛白と擬似鉛白」『正倉院学ノート』朝日選書623、pp.247～250
- 成瀬正和・奥谷喬司1996「南倉101-1楓蘇芳染螺鈿槽琵琶（背面）」『正倉院年報』第十八号，巻頭
カラー図版解説
- 新潟県立近代美術館ほか1999「中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝「唐皇帝からの贈り物」」展
図録
- 松村恵司2002「鈐帯金具の位階表示機能」『鈐帯をめぐる諸問題』pp.37～54
- 見島総合学術調査団1964「見島総合学術調査報告」山口県教育委員会
- 三宅久雄編集1999「皇室の名宝 正倉院南倉」週刊朝日百科02
- 山里純一1999「古代日本と南島の交流」吉川弘文館
- 和田軍一1961「正倉院宝物 南倉」朝日新聞社
- 和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司1996「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告書」『正倉院年報』第
十八号，pp.1～39
- 中国**
- 王自力・張全民1992「西安西郊出土の唐代玉帯」『考古余文物』1992年第5期，pp.46～50
- 河南省文化局文物工作隊第二隊1956「洛陽16工区76号唐墓清理簡報」『文物參考資料』一九五六年
第五期，pp.741～44
- 雄衡主編2000「天馬—曲村」科学出版社（中国）
- 陝西省博物館・文管会革委会鑽探組1973「西安南郊何家村發現唐代窖藏文物」『文物』一九七二年
第一期，pp.30～42
- 中国社会科学院考古研究所編著1999「中国田野考古報告集考古学專刊 丁種第五十七号 張家坡西
周墓地」中国大百科全書出版社
- 楊伯達編1993「中国玉器全集5」四、五
- 『文化大革命期間出土文物 第一輯說明』文物出版社1972